

メタ言語文化論 1 (認知言語学入門)

長谷部陽一郎 (同志社大学)

2009年4月20日

1 イントロダクション

1.1 認知言語学とは何か

この授業では「ことばと心」の問題について、認知言語学の立場から考えていく。受講者のみなさんは日本語という言語を日常的に話していることだろう。また、英語やその他の言語を外国語として学んでいることだろう。その中で、異なる言語に共通しているものは何か、違いをもたらしているものは何かといった問題については、多少なりとも考えたことがあるのではないだろうか。あるいは、ことばの意味とは一体何なのか、「わたし」の意志や意図を他者に伝えることが可能なのはなぜか、といった問題について思いを巡らしたこともあるのではないだろうか。認知言語学は、このような問題に対してアプローチするための枠組みを提供してくれる。

「心」については、以前から、心理学、哲学、脳科学、計算機科学、人類学、生物学など色々な領域で研究が進められてきたが、その全容を解明するには至っていない。しかし、私たち自身の内省的な観察に加えて、長年に渡り行われてきた哲学的・心理学的考察により、少なくともある種の基本的な性質についての共通認識はある。認知言語学は基本的にそのような一人称的視点からみた「心の理論」に根ざしている。また一方では、脳神経科学や計算機科学といった、周辺領域との結びつきを強め、日々新たに得られる知見を柔軟に取り入れている。一般に、心の働きのことを総称して「認知 (cognition)」と言うが、この認知をキーワードに、従来より広い視野でことばの仕組みを探る学問領域が認知言語学 (cognitive linguistics) である。

1.2 言語学における位置づけ

言語学には長い歴史がある。ことばの使用は人間にとって最も基本的な営みの1つであり、ことばについて人々か様々な思いを巡らせてきたのは、きわめて自然なことである。したがって、言語学の歴史は人類の歴史と並行していると言える。しかし、言語学 (linguistics) という名の学問が成立したのは意外に新しく、それは19世紀末頃のことである。それ以前は、言語の問題は哲学の一分野として捉えられてきた。認知言語学を含む現在の言語学の礎を築いたのはフェルディナン・ド・ソシュール (1857-1913) という人物で、彼の言語理論は心理学や哲学など幅広い分野の研究にも大きな影響を与えた。



図1 Saussure

認知言語学は言語学という大きな領域に位置づけられる枠組みの1つである（実際には理念的に共通する数々の枠組みの集まりと言った方が正確）。認知言語学以外の枠組みとしては、ノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）による生成文法理論（generative grammar）やマイケル・ハリデー（Michael Halliday）による選択体系機能言語学（systemic functional grammar）などがあり、それぞれ異なった観点から異なった問題意識のもとに言語という対象に取り組んでいる。認知言語学は、元々生成文法の研究者であったジョージ・レイコフ（George Lakoff）やロナルド・ラネカー（Ronald Langacker）らが、言語学界のデファクト・スタンダードであった生成文法への理論的反発から、70年代から80年代にかけて作り出した、比較的新しい言語学の潮流である。

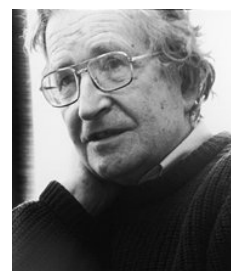


図2 Chomsky

1.3 認知言語学の特徴

1.3.1 ものの見方・考え方

理論的詳細については後に譲ることにして、ここでは認知言語学の特徴を2つだけ述べておきたい。まず第一に認知言語学は「もの見方・考え方」の学問であることが挙げられる。私たちはことばを用いて他者とのコミュニケーションをはかるが、それ以前に一すべてでないにしてもある部分については「思考すること自体」のためにことばを用いる。したがって、日本語であれ英語であれ、発話されることばの1つ1つには必然的に私たちの「もの見方・考え方」が反映されることになる。

もちろん、「もの見方・考え方」が言葉に反映される具体的な形は様々で、少なくともそこには3つのレベルが存在する。第一に、話者自身による事態把握の仕方や意図・意志といったものが現れてくるレベルがある。同じものを見ても、それをいかに言語で表現するかは、実際のところその人次第である。ここには、その時々目的や意図、これまで生きてきた中での様々な経験といったものが大きく関わってくる。

第二に、ある文化圏・言語圏の中で人々が歴史的・集合的に世界・社会をどのように捉えてきたかが反映されるレベルがある。例えば、日本語と英語を比較すると、共通点もさることながら、多くの相違点が見出される。それらの多くは単なる偶然ではない。これらの言語が用いられてきた背景にある社会制度や生活様式、そしてそれらに適應する形で育まれてきた価値観といったものが、重要なファクターとなってきたと考えられる。

そして第三に、文化、社会、言語の境界線を越えて、生物学的に定義された「ヒト」という種全体の性質が反映されるレベルがある。言語の使用はヒトという種のみには与えられた特権である。チンパンジーやボノボといったヒト以外の類人猿にも優れた認知能力があることは間違いない。しかし自然環境において言語を作りだし、世代を超えてそれを伝えていくことができたのはヒトのみである。言語には、生物としてのヒトが世界をみる視点が深く刻み込まれている。

このように、言語には「個としての」「社会としての」「種としての」私たちの視点が関わっている。認知言語学ではこれらのいずれをも軽んじることなく、各レベルにおける「もの見方・考え方」がどのように言語化されているかを明らかにしていく。

1.3.2 用法基盤主義

認知言語学のもう1つの重要な特徴は、用法基盤（usage-based）主義を掲げていることである。自然科学の多くの領域には「体系」と呼ばれるものがあり、体系は限られた数の原理と規則によって成り立っている。こ

の仮定の下に、研究者たちは、トップダウン的に現象の説明を試みてきた。このような方法を「演繹」というが、言語学においても 20 世紀には演繹的な方法論が広く用いられるようになり、特に 1950 年代にチョムスキーによる生成文法理論の登場でそれは確立された。しかし、認知言語学では演繹的方法を尊重しつつも、度外れに適用に対して警戒的な態度をとる。

理論を作っていく際に注意しなければならないのは、それを構成する要素が、純粋に理論的な目的のために付け加えられたり、取り除かれたり、修正されたりしてしまうことである。説明される側の現象を差し置いて、説明する側の理論をどんどん抽象化していくと、構築物としての美しさは保たれたとしても、そもそもの出発点である「現象」からは切り離されたものとなってしまうかねない。事実、認知言語学の立場からすると、今も言語学界の主流である生成文法理論はそのような性質を示している。

「理論のための理論」ではなく、常に文字通りの意味で「ことばの理論」であるために、認知言語学では実際の発話を重視する。もちろん、科学の一分野として理論的な精密さを求めることは重要であり、これからの授業で見ていくように、認知言語学でも数多くの理論的概念が提案されている。また、それらはいずれも様々な度合いで「抽象化」されている。しかし、基本的にどの概念も言語現象として実際に存在する用例と結びついており、現象から直接的に導き出すことが可能なものとなっている。認知言語学において、理論は実際の言語現象に「動機付けられた」ものでなければならない。言語研究には演繹的なだけでなく「帰納的な」方法論も必要なのである。

生成文法理論の自然科学的手法に懐疑的なことから、認知言語学はときに主観的であるとして批判を受ける。しかし、認知言語学はむしろ高い客観性を備えた枠組みであると言える。認知言語学では、閉ざされた体系内での論理的整合性のみならず、広い視野を取ることを是とする。ことばが心と密接に結びついたものであるならば、その仕組みを明らかにするために、心理学、哲学、脳科学、計算機科学、人類学、生物学など、近年めざましい発展を遂げている領域とのつながりを重視しなければならない。「閉じた」体系の中で理論を高度に抽象化させていくのではなく、常に現象と向き合い、それらの一つ一つに認知的な動機を見いだしていく作業を積み重ねる。それが認知言語学の方法である。

1.4 これから扱っていく内容について

以下に次回以降の授業テーマと各回のキーワードを挙げておく。

ことばと知覚

知覚 (perception)、認識 (recognition)、ゲシュタルト (Gestalt)、図と地 (figure and ground)、前景化と背景化 (foregrounding/backgrounding)

認知と文化

「する」的言語 ('do' language)、
「なる」的言語 ('be' language)、
相対的参照枠 (relative frame of reference)、
絶対的参照枠 (absolute frame of reference)、
サピア・ウォーフの仮説 (Sapir-Whorf Hypothesis)

カテゴリー化

カテゴリー化 (categorization)、
家族的類似性 (family resemblance)、
プロトタイプ (prototype)、
拡張 (extension)、
基本レベルカテゴリー (basic level category)、
放射状カテゴリー (radial category)

スキーマ

イメージ・スキーマ (image schema)、スキーマ化 (schematization) 多義性 (polysemy)、意味のネットワーク (semantic network)、事物カテゴリーバイアスと形バイアス (taxonomic bias/shape bias)

メタファー

比喩 (metaphor)、修辭的メタファー (rhetorical metaphor)、概念メタファー (conceptual metaphor) マッピング・写像 (mapping)、起点領域と対象領域 (source/target domain)、不変性仮説 (invariance hypothesis)

メトニミー

換喩 (metonymy)、提喩 (synecdoche)、参照点構造 (reference point model)、活性領域 (active zone)

言語と主観性

主観性 (subjectivity)、客観性 (objectivity)、間主観性 (intersubjectivity)、グラウンディング (grounding)、モノと関係 (thing and relation)

視点と文法

視点 (vantage point)、仮想的移動 (fictive motion)、話法 (speech)、主体化 (subjectification/subjectivization)

構文の重要性

構文的意味 (constructional meaning)、構文文法 (construction grammar)、アクション・チェイン (action chain)

ヒトの進化と言語

言語の起源 (origin of language)、進化論 (evolutionism)、FOX2P 遺伝子 (FOX2P gene)、前適応 (preadaptation)、認知発達 (cognitive development)

言語習得

言語習得 (language acquisition)、系統発生 (phylogeny)、個体発生 (ontogeny)、漸進効果 (ratchet effect)、共同注意 (joint attention)、他者の心 (other minds)

参考文献

- [1] 瀬戸賢一. よくわかる比喩—ことばの根っこをもっと知ろう. 東京：大修館書店, 2005.
- [2] 池上嘉彦. 語の感覚・日本語の感覚—“ことばの意味”のしくみ. 東京：日本放送出版協会, 2006.

- [3] 池上嘉彦. 日本語と日本語論. 東京：ちくま書房, 2007.
- [4] 河上誓作（編著）. 認知言語学の基礎. 東京：研究社, 1996.
- [5] デイヴィッド・リー. 実例で学ぶ認知言語学. 東京：大修館書店, 2006.
- [6] 榎山洋介, 町田健. 認知意味論のしくみ. 東京：研究社, 2002.
- [7] 大堀壽夫. 認知言語学. 東京：東京大学出版会, 2002.
- [8] 谷口一美. 認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー. 東京：研究社, 2003.
- [9] 谷口一美. 学びのエクササイズ 認知言語学. 東京：ひつじ書房, 2006.
- [10] ジョン・R・テイラー. 認知言語学のための 14 章. 東京：紀伊國屋書店, 2008.
- [11] ジョン・R・テイラー, 瀬戸賢一. 認知文法のエッセンス. 東京：大修館書店, 2008.
- [12] 辻幸夫（編）. 認知言語学キーワード事典. 東京：研究社, 2002.
- [13] 辻幸夫（編）. 認知言語学への招待. 東京：大修館書店, 2003.
- [14] フレデリック・ウンゲラー, ハンス-ヨルグ・シュミット. 認知言語学入門. 東京：大修館書店, 2008.
- [15] 山梨正明. 認知言語学原理. 東京：くろしお出版, 2000.
- [16] 山梨正明. ことばの認知空間. 東京：開拓社, 2004.
- [17] 山梨正明. 認知構文論—文法のゲシュタルト性. 東京：大修館書店, 2009.
- [18] 吉村公宏. はじめての認知言語学. 東京：研究社, 2004.

上は日本語で読むことができる認知言語学の入門書のリストである。中には初心者でも読み易いものも、比較的高度な内容が扱われているものも含まれる。できればこれらのうちの数冊を手にとって読んでみて欲しい。英語で書かれたものということであれば、さらに多くの文献が存在する。今後の授業でも適宜紹介していきたい。